

「リベリアの白い血」映画監督：福永壮志<sup>ふくながたけし</sup>氏オンライントーク



北海道出身でニューヨークを拠点に活動、2015年に監督した初の長編映画「リベリアの白い血（原作 Out of my hand）」は、ベルリン国際映画祭のパノラマ部門に正式出品、ロサンゼルス映画祭で最高賞を受賞するなど世界各地の映画祭で上映された作品です。

また、2016年には、カンヌ国際映画祭が実施するプログラムで世界中から選ばれた6人の若手監督の内の一人に選出されるなど注目を高めている監督です。

現在、アイヌ民族のリアルな姿を描いた最新作、映画「アイヌモシリ」が全国で公開されています。

**司会者** はじめに、会場の皆さんに一言お願いします。

**監督** 「リベリアの白い血」を監督した福永壮志と申します。

みなさんお越しいただきありがとうございます。こういう機会をいただきすごく光栄に思っています。今紹介していただきましたが、北海道出身で昨年東京に移ったのですが、それまで16年間おもにニューヨークで生活してしていました。なんで日本人の僕がリベリアの映画を撮ったのだろうってきっと思われると思うのですが、長い間住んでいる中で自分も移民の一人としてニューヨークで生活していて、いろんな国から集まって日々を一生懸命生きている人たちに励まされて、いつかそういう姿を映画で撮れたらというのがありました。その後この映画の舞台にもなっているリベリアのゴム農園の労働者たちについてのドキュメンタリーに関わることがありまして、そこで見たすごく過酷な状況の中でもひたむきに力強く生きている人たちに刺激とか心を打たれまして、そのリベリアの移民がニューヨークに渡るといって映画をフィクションで描くことでいろんなことが伝えられると思って、こういう映画を作るに至りました。

**司会者** ありがとうございます。映画がますます楽しみになりました。

今はどちらにいらっしゃいますか？

**監督** 東京の自宅です。

**司会者** 秋田にいらしたことがありますか？

**監督** 実は、秋田に2年近く住んでいました。高校を卒業した後に留学することを決めて、今は名前が変わって違う学校になりましたが、雄和町にありましたミネソタ州立大学秋田校でまず英語や留学する準備をしてからミネソタに行きましたので、秋田にちょっと繋がりがあります。

**司会者** 秋田にゆかりのある監督さんなんですね。

秋田に縁のある監督さんがリベリアで映画を撮影され、また、にかほ市とリベリアも縁ができたという事でいろんな運命を感じました。にかほ市にいらしたことはありますか？

**監督** にかほ市には行ったことがないんですけども、今日ご挨拶をさせていただく前にいろいろ写真を見て、とてもきれいな所なのでいつか行ってみたいと思っています。

**司会者** ありがとうございます。では、映画撮影での思い出を教えてください。

**監督** 天候が炎天下だったりスコールっていう激しい豪雨で撮影が止まったりだとか、僕らが撮影した地方には電気が通っていないので、発電機と一緒に移動して、そこから電気を供給して照明をたくとか、そういう状況がとても大変だったけど、その一方で自然が本当に美しくてふとした夕日だったり撮影後の星空だったりそういう景色に感銘を受けながら、一生懸命撮ってました。そういう景色や天候、自然が印象的です。

**司会者** いろいろと大変な思いをされつつも思い出のある撮影だったということなんですね。映画と一緒に撮ったりリベリアの方の印象はいかがでしたか？

**監督** もちろんいろんな方がいますが、やっぱりリベリアは長い間紛争があって、それを乗り越えて今ちょっとずつどんどん前に進んでいるので、リベリアに住んでいる皆さんはそれぞれいろいろな形で紛争に向き合ってきたと思いますが、そんな辛い過去も見せないくらいとても明るくておおらかで、そういう人の強さが印象に残っています。

**司会者** それでは映画の見所、思い出のある場面を教えてください。

**監督** たぶん最初に見られる方はドキュメンタリーなのかなと思う方が結構いて、というのも、俳優じゃない人たちをたくさん起用して、現実を寄せながらフィクションとして成り立たせるという撮影方法だったので、かなりドキュメンタリー要素の強いフィクション映画なんですけど、その中でこれを選んだ理由はやっぱり自分が日本人でいながらリベリア人だったりリベリアのことを描くという事で、自分が思い描いたものを脚本に書いてそのまま撮ろうとしても、どうしても先入観だったり現実と違う部分が出てくると思ったので、それをすり合わせるためにそういう撮影方法を用いました。

やっぱり、一番最初にこの映画ではリベリアのゴム農園にいる労働者の力強さだったり、過酷な状況の中でも人間の尊厳を保っている姿に心を打たれたので日本人としてリベリアの映画というよりは、一人間として人間の映画を作りたいと思ったので、先入観なく同じ人の話として見てもらって、そこから強さに共感してもらったら嬉しく思います。

**司会者** ここにいらっしゃる皆さんには先入観なしでまずは見ていただきたいと思うのですが、実は私は先に見てしまったんですよ。それで何となく監督のお気持ちとしてはアメリカとリベリアの物を対比させることで現実を描いているのかなという気がしたんです。例えば、新しいベッドであるとか携帯電話といった物を対比させることでリアルな映像を描いてるのかなと思ったのですがいかがですか。

**監督** そうですね、まずリベリアの移民がニューヨークに渡るという設定にしたのもやっぱり遠い国で起こってる知らない人たちのことではなくて、身近に感じられる物語にしたかったので、人が実際ニューヨークに渡ってきてタクシードライバーになる、タクシードライバーはニューヨークに住んでいると日常的に接する人たちなので、そういう風にドライバーだったり接する人たちの後ろにいろんな物語があって、自分たちにとって身近なこと

に感じてほしかったのでそういう設定にしましたし、今おっしゃっていただいたように文化とかが違って人として共通するものはたくさんあるので、そういう共感を覚えられるようなものを作りたいと意識してそういう要素を入れました。

**司会者** ありがとうございます。もう一つお聞きしたいのですが、日本語でのタイトルは「リベリアの白い血」で、原題は Out of my hand ですよね。原題に込められた思いはありますか。

**監督** Out of my hand はいくつか理由があって、理由の一つはリベリアのゴム農園でゴムの原料であるラテックスの最終作業は手を使っていて、その手がとても印象的だったので、手から何かを作り出している作業の意味合いと、手から何かを持っていかれるという意味もあって搾取されているリベリアの労働者の現状と、また、Hand を Hands にするとコントロールできないこと、手に負えないことという意味がありまして、原題に s がついていないので、そう意味ではないですが、その意味合いも少しあって主人公が自分の限界を超えて、何かをつかもうとする姿を描いた映画なのでそのタイトルになりました。

**司会者** 今お聞きした原題に込められた思いを感じとって、これから鑑賞したいと思います。それでは福永監督お忙しい中ありがとうございました。会場の皆さんと手を振ってお別れしたいと思います。



2020年12月26日 仁賀保勤労青少年ホームにて  
司会者 永田佳乃子氏